

研究タイトル：20世紀東中欧における児童福祉史



氏名：	江口 布由子／EGUCHI Fuyuko	E-mail：	feguchi@ge.kochi-ct.ac.jp
職名：	教授	学位：	博士(比較社会文化)
所属学会・協会：	歴史学研究会、東欧史研究会、日本西洋史学会		
キーワード：	近現代史、東中欧、児童福祉、家族政策、優生思想		
技術相談 提供可能技術：	<ul style="list-style-type: none"> ・教育社会史・福祉社会史に関する研究 ・児童労働問題に関する研究 ・近現代史に関する研究 		

研究内容：

◆ 研究概要

第一次世界大戦の終結から第二次世界大戦の開始までの20年余年(「戦間期」)は、ヨーロッパのみならず全世界において様々な政治社会運動が沸騰し、あらゆる種類の社会変革のアイデアが提起され、そして試みられた時代でした。そのなかでもっとも高度に政治的な課題となったのが、もっとも非政治的な空間とされてきた家族でした。いかにして総力戦で「傷ついた」家族を構築・再構築(あるいは解体)するか——それは政治指導者にとっても人々にとっても差し迫った問題でした。この時期、家族機能を私領域から公的領域に置き換えようとするさまざまな実験的試みが行われることとなります。こうした戦間期の試みは第二次世界大戦後の「資本主義の黄金時代」の福祉国家の基礎となります。本研究は、福祉国家の構造変動に直面した現在を見据え、いまいちど「福祉」や「公共性」と家族の関係を再見す作業でもあります。

◆ 研究テーマと成果の例

本研究では、前衛的な実験都市ウィーンとカトリック保守の強いオーストリアを主たる対象としています(「赤いウィーン」と「黒い地方(オーストリア)」と呼ばれることもあります)。現在は、とくに「赤いウィーン」の家族政策・児童福祉政策を分析し、「社会的な子どもの養育・教育」の実践とその内実を研究しています。これまでの成果は以下の著作という形で表わしてきました。

1. (共著) 江口厚仁・吉岡剛彦・林田幸広編『圏外に立つ法／理論——法の領分 [おしごと] を考える』第9章一九後半～二〇世紀前半におけるウィーンの「子どもの流通」——今、社会的子育ては展望できるだろうか。(ナカニシヤ出版 2012) pp.182-219
2. (共著) 大津留厚ほか(編)『ハプスブルク史研究入門』第16章 新しい国家、健やかな子(昭和堂 2013) pp.217～227

図1 カール・マルクス・ホーフ
(市営の集合住宅)



図2 集合住宅内の共同洗濯場(注1)



図3 ウィーン市立児童養護施設(注2)



図1は戦間期ウィーンを代表する市営住宅で「カール・マルクス・ホーフ」です。オットー・ヴァーグナーの弟子エーンが設計しました。この集合住宅は単なる世帯の寄せ集めではなく、様々な家族をつなぐコミュニティとなるよう構想されていました。たとえば図2の施設内の共同洗濯場は、「共働き」が当たり前の女性労働者の負担を軽減すると同時に女性たちのコミュニケーション・スペースともなっていました。また戦間期のウィーン市は「社会全体での子育て」にも力を入れました。図3は児童養護施設の様子です。第一次世界大戦前の「軍隊式」孤児院とは全く異なるこの施設では、ウィーン大学医学部の医師たちや専門教育を受けた女性ケースワーカーが子供のケアにあたりました。そのなかには「反抗期」という概念を提起した児童心理学者 Ch.ビューラーや児童精神科医 E.ラザー(その弟子が「アスペルガー症候群」の名で知られる H.アスペルガーです)など、現在でも有名な人物たちがいました。

注1) Blau, Eve, *The Architecture of Red Vienna, 1919-1934*, Cambridge: The MIT Press, 1999. 注2) Wolfgruber, Gudrun, *Zwischen Hilfestellung und sozialer Kontrolle. Jugendfürsorge im Roten Wien dargestellt am Beispiel der Kinderabnahme*, Wien Edition Praesens, 1997.

提供可能な設備・機器：